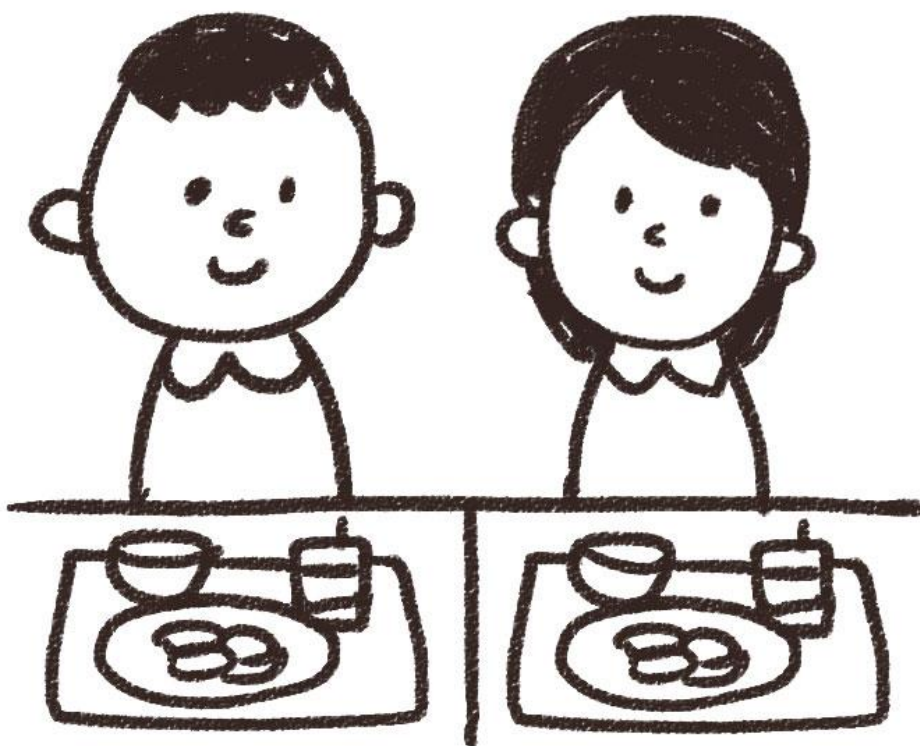


食事の介助 簡易マニュアル

～顎介助・口唇介助～



～食事の介助～

<顎介助>

下顎を介助することによって嚥下の訓練をします。

○どのような場合に行うの？

舌訓練と併用して行います。飲み込む際に顎が上下に動いてしまったり、舌が出てしまう人などが対象です。

○何故行うのか？

正常な飲み込みの場合は、下の顎が安定して舌で食べ物を喉の方に送り込みます。ところが、赤ちゃん飲みや正常な飲み込みができない場合、下の顎が動いてしまったり、舌が出てきてしまったりします。そこで、下の顎を介助してしっかり閉じさせた状態で舌だけで食物を送り込めるように促してあげます。

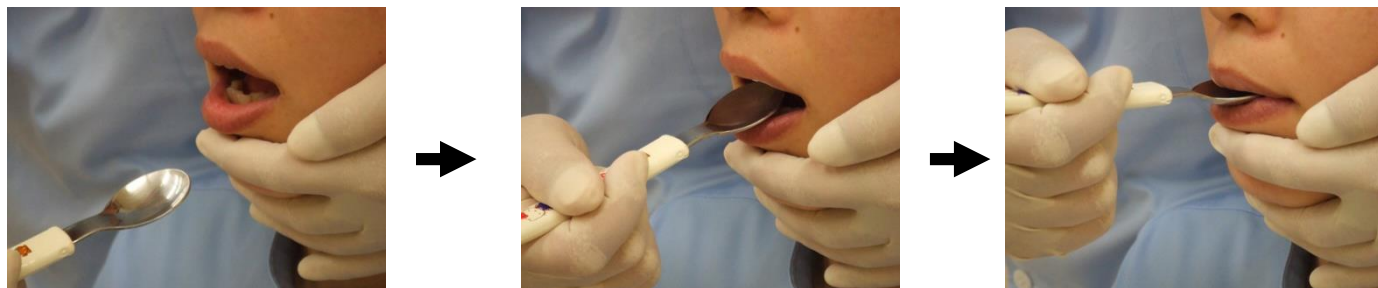


図16

○方法

図16に示すように捕食後、顎をしっかりと閉鎖させた状態で嚥下させます。嚥下が完了するまで顎介助を続け閉鎖させたままにします。

○注意しなければいけないこと

子どもでも顎の力はとても強いです。しっかりと押さえてあげないと舌が出てきてしまうなど、効果が無くなってしまいます。顎介助の際に力が入り過ぎてしまい、図のように首が後ろに反ってしまう場合がありますが、この場合も上手に飲み込むことができません。頭が後ろに反らないように注意する必要があります。

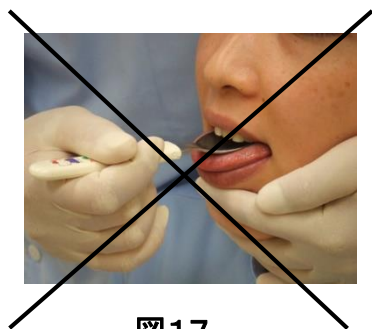


図17

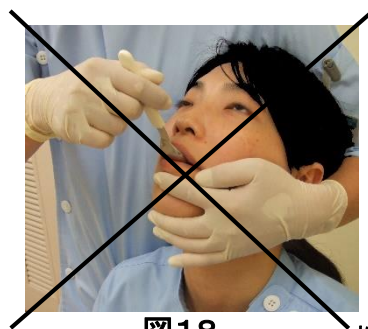


図18

<口唇介助>

口唇を介助して食物を口唇で取り込むようにします。



図19

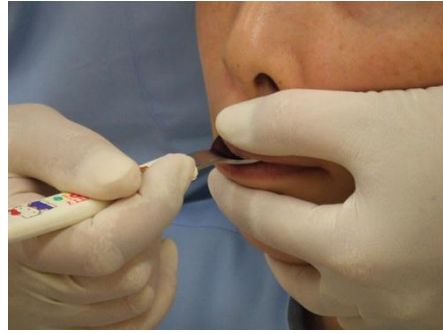


図20

○どのような場合に行うの？

食物を取り込む際に口唇で取り込めない人、歯でそぎ取ってしまう人などを対象に行います。上唇を下ろす場合は親指でも人差し指でも構いません。

○何故行うのか？

食物を取り込む際には口唇を使って取り込みます。ところが、お口を大きく開いたところに食物を入れてもらい食べていた、あるいは食物を小さく切ってフォークに刺して食べていたなどの場合口唇を使わないまま食べる癖がついてしまいます。口唇は食物をお口の中に取り込むだけでなく食物の処理方法を決めるなどとても重要な場所です。そこに食物を触れさせることでより良いお口の動きを引き出させます。

○方法

図19に示すように下唇の上にスプーンを置き顎が閉鎖し上下口唇でしっかりと食物を取り込むようにします。自ら顎を閉鎖しない場合や上唇がおりてこない場合には図20のように顎介助や口唇介助をしてそれらを促します。

○注意しなければいけないこと

他の訓練や介助と同様に顎が開いた状態では口唇をしっかり閉じることができません。介助の際に口が開いてしまう場合は、しっかり顎を閉じさせてから上唇を下げてあげましょう。図21のように上唇だけ下げることは効果が少ないので好ましくありません。

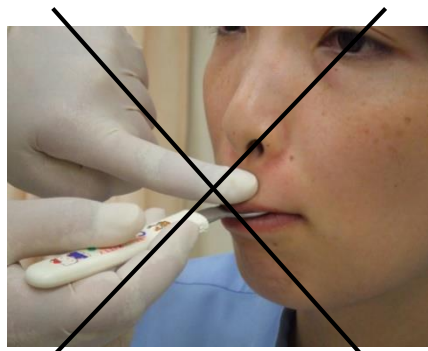


図21